

小学生の部 『やまなし』② 宮沢賢治

ナレ③ …… 二十二月

蟹の子供らは、もうおぼろ大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすっから変りまじだ。

白い柔かな田石もじりじり来て、小さな錐の形の水晶の粒や、金霊母のかけらもながれて来てしまじだ。

そのしめたい水の底まで、ラムネの瓶の月光がうっほら透りおろ天井では波が青いお火を、燃したら消したらおんやあだらはしとて、ただいかにも遠くからうらやうら、その波の音がびびりて来るだけです。

蟹の子供らは、あんまり目が明ゆる水がきれいなので睡りながら外に出て、しばらくはたまいて泡をはいて天上の方を見まじだ。

カニ兄 …… 『やっぱり僕の泡は大きいな。』

カニ弟 …… 『兄さん、わびと大きく吐いてるんだら。僕だつてわびやにならまじと大きく吐けるよ。』

カニ兄 …… 『吐いていらん。おや、たったおねねのうら。うらから、兄さんが吐くか見えておじで。そら、ね、大きいだら。』

カニ弟 …… 『大きかないや、おんなじだい。』

カニ兄 …… 『近くだから自分のが大きく見えるんだよ。そなら一緒に吐いて

みよう。いいかい、そら。』

カニ弟 … 『やっぱり僕の方大きいですよ。』

カニ兄 … 『本当かい。じゃ、もーもーはくへん。』

カニ弟 … 『だめだい、そんなにのびあがってほ。』

ナシ③ … 『またお父さんの蟹が出て来ました。』

カニ父 … 『もうねろねろ。遅いぞ、あしたイサドへ連れて行かぞ。』

カニ弟 … 『お父さん、僕たちの泡、どっち大きいの』

カニ父 … 『それは兄さんの方だろ。』

カニ弟 … 『そうじゃないよ、僕の方、大きいんだよ』

ナシ③ … 『弟の蟹は泣きそうになりました。』

ナシ③ … 『そのとき、トン。』

黒い円い大きなものが、天井から落ちて、ずっつとじゅんじゅん、又上入のぼって行きまふた。

キラキラッと黄金のぶちがひかりまふた。

カニ兄弟 … 『かわせみだ』

ナシ④ … 『子供達の蟹は顔がさかへん。』

ナシ④ … 『お父さんの蟹は遠めがなるのやうな画方の眼をあらうと限の延びて、くへん。』

カニ父 … 『そっつじやない、あれはまなまなだ、流れて行へん。』

配役

ナレーション③

・
・
・
E

ナレーション④

・
・
・
F

カニ兄②

・
・
・
G

カニ弟②

・
・
・
H

※選考の結果、配役を決定します。

カニ父

・
・
・
渡部陽一